

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 大尾 侑子

論文題目 地下出版と教養のメディア史——近代日本における教養主義の裏面

本論文は近代日本において「低俗文化」とみなされてきた軟派出版、いわゆる「エロ（性風俗）」、「グロ（猟奇、犯罪）」を専門に取り扱った版元とその刊行物——軟派出版——に注目し、教養主義の言説空間との関係性から捉え返すことで、近代日本の知的空間を再考するものである。しばしば近代日本の出版文化は、「エリート＝高級文化／大衆＝低級文化」といった線型的な対応関係によって論じられてきた。こうした思考法が顕著にあらわれているものの一つに、蔵原惟人によって提唱された「岩波文化＝教養主義／講談社文化＝修養主義」という対比構造がある。しかし社会階層と審美判断の構造的相同性という強い前提に立つこの図式は、出版文化と「知」の重層的かつ豊穡な側面を捨象するだけでなく、「教養（主義）」概念の理解をも平板なものに閉じ込めてしまう点で批判も向けられてきた。

こうした問題意識から本稿は、近代日本において「エロ・グロ」といった言葉で表現されてきた「非正統的な書物」の世界を対象に、その周辺に広がる知のネットワークと、そこに通底する教養観について分析・検討がなされている。具体的には梅原北明や酒井潔、花房四郎（中野正人）、斎藤昌三、伊藤竹酔らが集った「文芸市場社」とその周辺の人的ネットワークと、そこに通底する教養観を明らかにすることで、これまで論じられてきた教養主義とは別種のオルタナティブな教養の水脈を示し、社会学のみならず、メディア史、文化批評にも資する知見を得ることが目指されている。

こうした観点から、梅原北明の「文芸市場社」を中心に分派分裂し、広がりを見せた戦前昭和の珍書屋のネットワークと、そこから発行された特殊風俗文献を分析対象とし、「地下出版界」と呼ぶべき文化圏の消長が精査される。その際、「地下出版界」が他の領域からの自律性を獲得するために用いたコミュニケーションの指標として、①価値：コミュニティ感覚や集団的アイデンティティを作り出す価値観や趣味 taste、②メディア形式：頒布されたメディアの形式的側面、③実践：身体／肉体的パフォーマンスの三点に著者は着目する。本論文は書物や雑誌のテキスト（書かれたもの）のみを分析対象とするのではなく、彼らがこだわりを見せた書物の形式性や、ときに「都市＝街頭」で演じられた

身体／肉体的なパフォーマンス性についても同様に地下出版の「界」を形成する重要な構成要素として捉えている。具体的には、〈第一部〉地下出版界の前史、〈第二部〉地下出版界の成立、〈第三部〉そして衰退という3つの流れを検討することで、これを動態として捉えることが試みられている。

まず〈第一部〉では、梅原北明を中心とする珍書屋のネットワークが形成された経緯と、軟派出版へとつながる理念の萌芽について検討される。これにより、「軟派出版界の元締め」と呼ばれた文芸市場社が、『文藝時代』から脱退した今東光をはじめ、プロレタリア文学や前衛芸術の村山知義らを擁した雑誌『文覚』の超党派的なネットワークを起源としたことが明らかにされる。続く第2章では、彼らが作家を搾取し資本家となった出版者、そしてブルジョワ文壇への批判を行い、自費出版同盟というオルタナティブな集団を構想したこと。そして第3章では、「芸術」の価値を市場のメカニズムが決定するという「文芸市場」のメカニズムを、「作家の直筆原稿叩き売り」という身体的なパフォーマンスによって換骨奪胎するさまを論じている。

〈第二部〉では、彼らが「変態」や「談奇」といった独自の概念を運用しながら、趣味的研究を媒介とした共同性を形成し、それが地下出版空間として自律化していくのかが明示される。第4章では雑誌『変態資料』を中心に、教養主義的な価値に対して「悪趣味」な対象、素材を称揚し、それらを「研究」と称して価値転倒させることで、「真の教養」や卓越性を示す出版人の振る舞いが記述される。つづく第5章では、艶本叢書類のパンフレットにおける「円本」批判言説が検討される。彼らは大衆的教養のシンボルである円本を批判し、書物の「モノ＝オブジェ」としての性質に執着することによって、愛書家としての“あるべき書物像／読書観”を提示した、というのが著者の分析である。

第6章から第7章では、出版検閲の強化が推進されるなかで、梅原北明とその周辺の出版人がいかなる応答をみせたのかが論じられる。そこでは、生真面目な抵抗ではなく、発禁の付加価値化や国外逃亡にみられる劇場的なパフォーマンス性が精査される。とくに第6章では彼らが「談奇」という造語によって共有した価値観と、それに基づく東アジア圏へのまなざしを検討している。当時の中国の文化風俗に精通した「シナ通」も巻き込みながら、彼らは「上海／支那」を、ある種失われた「浅草」的なものとして理想化していたこと。そして「前近代性」的な「異／奇なるもの」（土俗、怪奇、獵奇性）へと向かう知的好奇心が、グロテスクという共通性において「江戸」と「支那」をパラレルなものとして捉えていたこともあきらかにされた。それは当時のモダニズム文化における野蛮主義（バーバリズム）と根を同じくする、いわば「近代国家日本」という優生意識が東アジアや南アジアの文化的未開性に向けたオリエンタリズムの眼差しを含むものでもあったことを筆者は説得的に論じている。

〈第三部〉では地下出版界が成熟し、さまざまな要因が複合しながら衰退していく様子に迫っている。第7章では軟派出版界の最期を飾ったとされる雑誌『談奇党』にフォーカスし、彼らの批判の矛先が検閲制度から、大衆化した「エロ出版」へとシフトしていたことが論じられる。第8章では、戦後の文化に戦前の軟派出版人脈がどのように受け継がれ、そして消えていったのかが検討される。戦前に「文献派」を自称した彼らにとって「文献＝他者」であった「変態」は、戦後のマニア雑誌において「当事者」として表象されるに至ったが、1950年代以降の悪書追放運動にともなう不良雑誌排除の機運が強まるなかで、こうしたマニア向けの雑誌もまた弾圧されていく。また1960年代のアングラの文化や文化批評家のなかでも、梅原北明や酒井潔、高橋鐵といった戦前の地下出版人脈がすくなく影響を与えていたことが明らかにされている。

こうした議論を通じて、「地下出版界」の栄枯盛衰には、つねにオモテの文化としての啓蒙主義的なコンテクスト（「岩波文化／講談社文化」的なもの）が表裏一体の形で言及、ないし意識されていたことが説得的に論じられる。そこには啓蒙文化への反発だけでなく、教養という文化資本と、それが支配する象徴暴力空間を共有する地盤があったことを、著者は説得的に説明する。

口述審査においては、「仮想敵」としている竹内洋の教養主義に関する見方を実は本論文も踏襲してしまっているのではないか、そのため、旧来の教養主義論の説明図式のなかに回収されてしまうのではないか、との論理構成についての質問や、書誌学的な観点からの史料批判・検討要請、戦後の「アングラ」「サブカルチャー」との異同についての質問、「エロ・グロ」というテーマ設定自体が地下出版的なものに親和的な言説や実践を担保している可能性があるのではないかという指摘、文化社会学、文化研究、歴史社会学、植民地研究についての先行研究の解釈についての批判などが提示されたが、いずれも適切な形で応答しており、希少な文献資料を下地とした精密な文献研究、近代日本における「卓越化」の持つ複雑性の描出などについて、高い評価がなされた。審議の結果、審査員全員の総意により、博士（社会情報学）を付与するに値する論文であると判断がなされた。

